



社会学部社会福祉学科

# 木原活信ゼミ合宿

in 同志社びわこリトリートセンター



11月22日(月)から23日(火)まで、木原ゼミの学部3・4年生と大学院生が集まり、合同の報告会を実施した。今回の報告会は学部3・4年生を中心として行い、有意義な時間を過ごした。

学部3年生は、毎年行う同志社社会福祉学会の際、いくつかのグループを組んでお互いの関心があるテーマを中心として発表する機会を持っている。それ故、5つのグループに分かれた3年生の全員(18名)が参加し、最後の作業を加えて発表する時間を持った。そして、全員(12名)が参加した学部4年生は、卒論論文を発表することにより、自らの考えを整理する時間を持った。大学院生は学部生を支援する立場として参加(修士：4名、博士：4名)し、各報告会にコメントやフォローする役割を果たした。木原先生を含めて全員39名が参加した。具体的なスケジュールは次のようである。

## スケジュール

### 11月22日(月)

- 13:45 JR京都駅発 湖西線敦賀行き(新快速)
- 14:18 北小松駅着
- 14:45 到着・荷物搬入(キャビン)
- 15:00~17:00 3年生、4年生は各自作業開始(セミナー室)
- 17:00~19:20 卒論発表(4年生)12名(一人発表8分質疑応答4分)
- 20:00~ 夕食
- 21:30~ キャビンごと入浴、作業など

### 11月23日(火)

- 7:30~ 朝食、チェックアウト 荷物はセミナー室へ
- 9:00~11:00 学会グループ発表報告(3年生)  
5グループ(一グループ発表13分 質疑応答5分)
- 11:20 リトリートセンター出発
- 11:44 北小松駅発京都市行
- 12:32 JR京都駅着 解散

## 3年生ゼミ・ポスト準備及び発表

### ① ストリートチルドレンの支援~3つのレベルにおけるエンパワーメントの実践を考える~

カンボジアにおける  
ストリートチルドレンの支援  
~エンパワーメントの視点から~



リートチルドレンが生まれる原因である貧困の現状を実際に現地に赴き現状を目のあたりにすることによって新たな発見や、文献や授業では知ることのできなかった事実を現地の人に話を聞くなど、現地調査ならではの方法により知れるのではないかと思い現地を訪問した。そこで当人が問題意識をもつことの重要性、貧困から抜け出すには「気づき」が大きな一歩だということを実感し、物資・経済による一時的な援助でなく将来につながっていくような内側からの支援、いわゆ

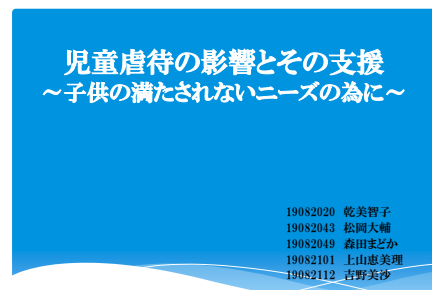
る「エンパワーメント」の視点から行う支援がストリートチルドレンの援助でも鍵になるのではないかと思います、今回この「エンパワーメント」に重きをおいた具体的な支援方法を研究することにした。

## ② 児童虐待の影響とその支援—子どもの満たされないニーズの為に—

今年の夏、私たちのチームのメンバーは、それぞれ児童福祉施設での実習を経験した。実習先は違う施設であったが、共通して全員が感じたことは、子どもたちの他者に対する暴力や私たち実習生に対する試し行動が顕著であるということだった。私たちは、それらの経験から、虐待を受けた子どもにみられる、他人に対する攻撃的な態度や過剰な甘えなどの試し行動はなぜ表出するのかを知りたいと考えた。

また子どもが、そのような行動を起こす原因には親との関係や、被虐待経験などの影響があるのではないかと問題を仮定した。攻撃的になっている子どもを落ち着かせるためだけの一時的な支援では、その子どもは結局また同じ行動を繰り返すことになり、根本的な問題を解決する支援になっていないと言えない。私たちは、子どもがとっている行動の裏にあるニーズを汲み取り、そのニーズを満たしてあげられるような支援を行わなければ、本当の意味での問題解決には至らないと考えている。

私たちは子どもの問題行動だけでなく、その背景（子どもがどのようなニーズを持っているのか）に目を向け、子どもたちに対して、どのような支援のあり方が求められているのかを、ソーシャルワークの視点から考察する。



## ③ 精神障害に対する偏見—池田小学校児童殺傷事件のマスコミ報道を問う—



日本では、精神障害に対して理解を深めてきたというよりは、隔離政策のように世間と切り離された存在として見られてきたように思う。そういったことも災いしてか、精神障害についての誤った解釈や無知がさまざまな偏見として表面化しているように感じる。そして、触法精神障害者の事件がマスコミで大きく取り上げられるようになり、世間の精神障害に対するイメージを作りあげてきた。

では、精神障害に対しての正しい理解をおこなっていくにはどうしたらよいか？

## ④ 知的障がい児の保育の在り方

障がい児にとって、発達の早期段階で適切な支援や療育・保育を行うかどうかによって、その子どもの将来の発達が大きく変わってくる。しかし日本の現状では一人ひとりにあった保育が提供されているとは言い難い。

日本では長い間障がい児保育に対して分離、隔離が行われてきた。しかしインクルージョンの国際的動向の中で、日本においても障害・特別ニーズを有する多様な子どもに対応するべく、教育面では特別支援教育という新たな支援体制が作られ、保育面でも統合保育が進められつつある。統合保育によって社会性やコミュニケーション能力が向上するなど、



障がい児の成長にとって良い影響は多々ある。だが日本の現状では同じ空間で健常児と障がい児が共に生活する統合保育において、放置や投げ入れ状態になっていることも少なくなく、必ずしも既存の統合状態が障がい児にとってよいとは限らない。一方、分離保育では一人ひとりにあった個別的な支援が提供できる。しかし、専門職等の職員の不足など、きめ細かい支援が行われている場は少ない。そこで幼児期にどのようなアプローチをし、どのような保育環境を設定していくことが知的障がい児にとって最も良いのかを考えていきたい。

### ⑤ 日北欧におけるキリスト教のもたらす政策への影響 —社会保障(雇用)政策の相違—



日本はかつて福祉国家を目指していた。しかし現在は貧富、教育機会などの差が激しくなり、格差が広がっている。また不況の影響によって「派遣切り」と呼ばれる非正規雇用者の大量解雇が起こり、生活保護を受けざるを得ない人々が増えている。その一方で、生活保護を受けられない人、打ち切られる人たちが多く現れ、憲法25条にある生存権の保障を確実にするセーフティネットも安定した形では機能しておらず、現在の日本は、一度落ちるとなかなか這い上がれない「滑り台社会」と呼ばれる危うい状況である。

本来なら生活保護、就労支援などを積極的に行い、支援を受ける前の社会的地位まで復帰させるのが政府の役割であるが、それにもかかわらず政府側からは状況を打破できる具体的な政策がでておらず、政府から何らかの支援を受けるべき人たちは社会からその存在を認知されず、現在の貧窮した状態は彼らの失敗であり、政府は責任を負わない、自己責任という一言に片付けられてしまっている。現在の日本の状況は国民の誰もが安心して暮らせる国ではなく、かつて目指した福祉国家から程遠い状況にある。そこで私たちは現在、福祉国家として国際的にも認められている北欧と日本を比較し、なぜここまで大きく差が出ているのか、と疑問に思い、日本と北欧の雇用政策の差に何か他の要素が影響、関係しているかどうか調べ、北欧にあるその要素が日本にはあるか、その要素が日本の政策に応用できるか、できないとするならばどのようにすれば応用できるか考え、日本の社会保障、雇用政策はこの先どのような形にしていくべきか考えていくことを目的にこの研究を進めていくものとする。

### 4年生ゼミ・卒論論文報告会 各論文のタイトルは次のようである。

#### 川北愛久里

「地域における非行少年の立ち直り支援のかたち—少年サポートセンターの立ち直り支援活動を通して—」

#### 林由紀子

「福祉に対するイメージや理解はどのような背景をきっかけにして生まれるのか」



#### 芳村真理

「ホームレス支援におけるアルコール依存患者への施策—大阪釜ヶ崎での支援活動を通して—」

**小河合欽**

「就学前の発達障害児とその保護者に対するサポート」

**瀬戸香那美**

「犯罪被害者支援を行うボランティアの現状と課題」

**太田朋美**

「知的障害特別支援学校における就労支援のあり方について」

**篠木遥**

「男性の育児休業促進という子育て支援」

**水島緑**

「学生のボランティア活動・地域活動への大学の支援の一提案ー同志社大学の学生に対するボランティア活動と地域活動に関する意識・実態調査からの考察ー」

**今井涼**

「『母性』の形成ー母性をめぐる女性たちの苦悩の軽減にむけてー」

**朝倉佳央莉**

「仏教者による寺院を拠点とした社会貢献ーそのあるべき姿の一案とその実現のためにー」

**長澤侑美**

「現代の日本社会におけるひきこもりと男性についてのー考察」

**池亀陽香**

「障害者の福祉用具が果たす役割とはー福祉用具の現状とこれからのあり方ー」

(文責・李 善恵)